

ポストモダンにおける大学生の成長モデルと 時間的展望獲得に関する探索的研究(6) —大学生生活充実度尺度 SoULS-12 によるクラスタ分析と 大学帰属感尺度 SUM-6 の比較—

○川上正浩(大阪樟蔭女子大学)
佐久田祐子#(大阪樟蔭女子大学)

坂田浩之#(大阪樟蔭女子大学)
奥田 亮#(大阪樟蔭女子大学)

キーワード: 大学生生活充実度, 大学帰属感, 大学生の成長モデル

問題と目的

筆者らは、「大きな物語」を喪失し、価値観が多様化したポストモダンを生きる現代大学生にとっての成長を把握することを目的として、心理学を専攻する女子大学生を対象に4年間のインタビューと調査を実施してきた。その結果、彼女らの変容パターン(成長モデル)として、「日常享楽」群(交友関係を中心に日常を「楽しく」過ごす、長期的な展望や自己の成長の実感に乏しい)、「日常学業充実」群(将来への不安が低く、専門的な学びを楽しんで大学生活全体を充実したものと感じる)、「不安切迫」群(将来への不安や焦りが高く、今現在の学業や自分についての満足・成長の実感に乏しい)の3群を抽出し、その特徴について検討してきた(川上他, 2014, 2018; 佐久田他, 2014, 2019等)。一方で、「交友満足」「学業満足」「不安のなさ」「大学へのコミットメント」の4因子から構成される大学生生活充実度尺度の開発を重ねてきた(最新の尺度は SoULS-12; 佐久田他, 投稿中)。本研究では、SoULS-12 の4因子のデータを用いて学生をクラスタに分け、成長モデル3群との比較を行う。その上で、各クラスタの大学に対する帰属感を比較する。

方法

調査対象者および調査時期

2015年11月~2019年11月、近畿圏の女子大学で心理学を専攻する大学3年生233名(平均年齢18.1歳、標準偏差0.70)に調査が実施された。

調査内容

大学生生活充実度尺度(SoULS-12)および大学への帰属感尺度SUM-6(奥田他, 2017)を実施した。

結果と考察

まず、SoULS-12の4下位因子尺度得点を投入して階層的クラスタ分析(Ward法)を行い、回答者を4クラスタに分類した(Figure 1)。第1クラスタ(67名)は全体的にSoULS-12が低いクラスタであり、学生生活全般に充実を感じていない群である。第2クラスタ(83名)は、全体的にSoULS-12が高いクラスタであり、学生生活が充実している。第3クラスタ(54名)は交友満足が高く、不安も感じていないが、学業満足は低くなっている。すなわち、大学における学業には充実感を得てはいないが、大学生活そのものに対しては、おそらく交友満足に支えられてポジティブに捉えている

群であると考えられる。第4クラスタ(29名)は、第3クラスタとは逆に、学業満足や大学へのコミットメントは高い一方で交友満足、不安のなさが低い。すなわち学業の場としての大学には充実感を得ているが、友人関係には期待が持たず、不安も高い群である。先行研究との関連で考えると、第2クラスタが「日常学業充実」群、第3クラスタが「日常享楽」群に対応すると考えることができる。一方で、「不安切迫」群は、本研究において第1, 第4クラスタに分離されたとも考えられる。すなわち不安切迫に至る道筋には、大学生活全般に充実感が感じられない第1クラスタのような状態と、学問の府としての大学に期待を維持しつつ、不安が高まる状態とがある可能性が示唆される。

これら4クラスタについて、群ごとにSUM-6の得点を比較した(Table 1)。一元配置分散分析の結果、クラスタ間のSUM-6得点の差は0.1%水準で有意であった($F(3, 229) = 26.44, \eta_p^2 = .25, p < .001$)。Holm法による多重比較の結果、第2クラスタで最もSUM-6得点が高く、次いで第3クラスタおよび第4クラスタ、最もSUM-6得点が高いのは第1クラスタであることが示された。

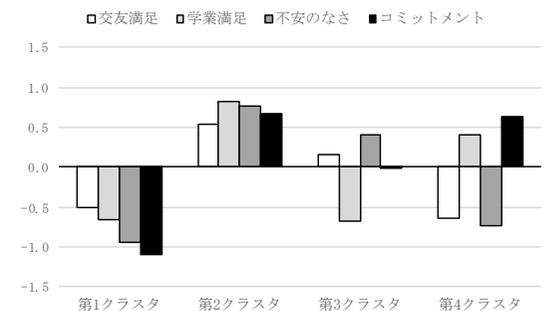


Figure 1 各クラスタのSoULS-12下位尺度得点(各得点はz得点)

Table 1 各クラスタのSUM-6得点

クラスタ	1	2	3	4
SUM-6	2.86 (0.10)	3.97 (0.09)	3.20 (0.11)	3.40 (0.15)

注) ()は標準誤差